





ひとりの男が生まれました……

かれは生きて死にました！

オワリ！

ぼくは彼女のこのセリフが忘れられない。

彼女はルーシー・ヴァンペルトといって、あの世界一有名なビーグル犬、スヌーピーのガールフレンド。ある日、弟のライナスに「この本、読んでくれる？」としつこくせがまれたルーシーは、めんどくさそうに本をひらくなり、さっきのセリフ。

このたった九コマのマンガのすごさは、そこで終わらないところだ。

ルーシーが本を投げだして去ったあと、とりのこされたライナスはつぶやく。

「なんてワクワクするような話だろ……現実はその男と会ってみたいような気を起こさせるほどだ……」  
命が軽くなった。

心がくすぐられて笑いだした。

ぼくも、この男と会ってみたいくなった。

ぐるぐる……

腹が鳴ったわけではない。

ぼくは、おおかみ男なのだ。

だれにも言ったことはない。

これからも、だれにも言わない。

ぼくは、おおかみ男の物語にありがちな悲劇なんて語りたくもない。

あのルーシーのセリフに当てはめてみてほしい。

ひとりのおおかみ男が生まれました……

かれは生きて死にました！

オワリ！

それだけのことだ。

)

夜行列車に引越そう。

いつからか、ぼくはその思いつきに夢中になった。

『ティファニーで朝食を』のホリーみたいに、いつも旅行中”でありたい。

どこに行くあてもない。

夜行列車に住みたいだけだ。

必要なのは、個室寝台。

相部屋はごめんだ。

しめきりのせまつた旅行記を書くわけじゃない。

ぐうぜん乗りあわせた人たちの行きさきを知る必要はない。

すれちがう人たちの過去を詮索する必要もない。

夜行列車に住むことが、それほどむずかしいとは思えない。

運賃という名の家賃を払い、部屋のカギのかわりに切符をうけとればいい。

問題は、どこを走る、どんな家にするか、ということ。

大都市か、野生の王国か。

海沿いか、砂漠地帯か。

東なのか、西なのか。

どうせなら、海沿いの野生の王国がいい。

寒がりの身としては西に向かいたい。

ぼくはネットで海沿いの野生の王国を走る夜行列車をさがす。

あるわけがないと思っていたが、ないわけでもない。

東京発、主に海沿いを、ときに野生の王国（実際には野菜の王国）を西にむかって走る夜行列車。

フルムーン・エクスプレス。

名前はともかく、ルートは気に入った。

住む家がきまれば引越すだけだ。

いま借りている部屋は、もちろん引き払う。

夜行列車以外に日常生活をのこしたままでは引越しにならない。

生活をまるごと移動する。

まったくあたらしい生活！

おおかみ男は、「いつも旅行中」

目がさめると、いつもちがう景色。

人生で二本のゆびに入る名案だ。

ところで、仕事はどうするの？

運賃という名の家賃をどうやって払いつづけるつもり？

ぼくは心の声を無視する。

吸血鬼がうらやましい。

ひとの血を吸ってりゃ生きていけるなんて。

仕事は、やめた。

ぼくは、あるシテイホテルのルームメイクだった。

満月を恐れるおおかみ男として、夜までかかる仕事はできない。

それで午前十時から午後三時で仕事が片づくルームメイクに落ちついた。

正社員ではなかったが、時給は最初から千円以上ついた。

とはいえ、労働時間からすると月の給料はたかが知れている。

やめて惜しいほどではない。

これで収入なし。

貯金は百万とちよつと。

引越しの費用としては、じゅうぶんだ。

ぼくのあたらしい家は、フルムーン・エクスプレス。

またの名を、フルムーン・エクスプレス荘。

長く住むなら、なるべく安い部屋がいい。

ネットでフルムーン・エクスプレス荘の間取りをしらべてみる。

家賃の面から、一人用A個室寝台はあきらめる。

家賃が安い一人用B個室寝台は、ソロとシングルと二種類ある。

ソロは家賃がさらに安い、画像で見るとかぎり、入居までにかぴかぴのミイラにでもならなければ住めそうにない広さだ。

長期にわたって暮らす生活空間として考えれば、家賃が割高になっても住みやすそうなシングルにした

い。  
部屋の種類がきまる。

あとは切符という名の部屋のカギを手に入れるだけ。

あたらしい部屋のカギは駅の窓口で、発車、つまり引越しの一ヶ月前から手に入る。いまから部屋のカギをおさえておけば、ちょうど五月の連休明けに引越しできる。

そして、ある日の午前十時、駅の窓口にはぼくがいた。

大型連休明けで世間が落ちつきをとりもどすころをねらえば、はげしい争奪戦にはなるまいと思っていたが、考えることは皆おなじだったらしく、それほど席に余裕があるわけでもなかった。

ぼくは一人用B個室寝台の往復切符を有効期限を考慮した上で買えるだけ買っておくということを優先して、細かい計画は立てないことにした。

せっかく夜行列車に引越そうというのに、また予定でがんじがらめの生活だけは避けたい。

家賃には敷金・礼金がつかない代わりに寝台料金と特急料金が加算されるので、ぼくは目玉に汗をかきそうな金額とひきかえに新居のカギを手に入れた。

引越しは、一カ月後。

部屋をひき払う手続きをすませたぼくは家具や本、CD、DVD、ガスコンロ、ノートパソコンなどをリサイクルショップに持ちこんだ。

車はもってない。

免許もない。

貴重な機動力だったシュウインの自転車を手放すのはしのびなかった。

アメリカ製のシュウインは、ぼくにとっておそらく人生で一台かぎりの外車になるだろう。



五月も半ばになり、ついに引越しの日がある。

部屋にはフルムーン・エクスプレス荘にもってゆくかぎられたものと、ちいさな植木鉢がひとつ。この光景に見おぼえがある。

一ヶ月前に手放してしまった本の最初の場面だ。

はじめ ジェニーには なにもかも そろっていました。

2 かいには まるいまくらが、1 かいには しかくい まくらがありました。

くしが ひとつと ブラシが ひとつ、のみぐすりが ふたつ、めぐすりが ひとつ、  
みみの くすりが ひとつ、たいおんけい 1 ぼん、それから さむいときに きる

あかい けいと の セーターが 1 まい。

そとを ながめる まどが ふたつ。

しょくじの おわんが ふたつ。

かわいがつてくれる ごしゅじんも いました。

でも、ジェニーは たいくつでした。

そこで まよなかに、きんの とめがねが ついた くらい カバンを だして、  
もちものを みんな つめると、おきにいりの まどから、

けしきに おわかれを しました。

「なにもかも そろっているのに」と、うえきばちの はなが いいました。

はなも、おなじ まどから そとを ながめていたのです。

ジェニーは、はっぱを 1まい かみちぎりました。

「わたしの まどは、ひとつだけ」

ジェニーは ためいきを ついて、はっぱを もう 1まい かみちぎりました。

はなは、いいつづけました。

「まくらが ふたつ、おわんが ふたつ、あかい けいと の セーターが 1まい。

めぐすり ひとつ、みみぐすり ひとつ、のみぐすり ふたつ、たいおんけい 1ぼん。

かいぬしも かわいがつてくれる」

「そうよ」と 言って、ジェニーは つぎつぎに はっぱを かみちぎりました。

「あなたには、なにもかも そろっている」

はなは もう 1ど いいました。

ジェニーは、はっぱで くちが いっぱいなので、ただ うなずきました。

「なのに、どうして でていくの？」

「それはね」

ジェニーは、はなを くきごと かみきりました。

「たいくつだから。ここには ないものが ほしいから。

なにもかも そろっているよりも もっと いいこと きっと ある！」

はなは、もう なにも いいませんでした。

なにも いえなくなっていたのです。

『ふふふん へへへん ぼん！』モリス・センダック、神宮輝夫訳、富山房刊

ぼくは植木鉢の花をかみちぎらない。

ジェニーは犬だけど、ぼくはちがう。

それに、いつまで待っても、花はなにも言わない。

花をかみちぎったあと、ジェニーはもちものをぜんぶもって“よのなか”に出てゆく。

ぼくのもちものは、くしがひとつ、ブラシがひとつ、つめきりがひとつ、頭痛薬がひとつ、体温計がひとつ、目薬がひとつ、鼻ぐすりがひとつ、かぜ薬がひとつ、胃ぐすりがひとつ、下痢どめがひとつ、せき止めがひとつ、湿布薬と、きず用消毒薬、うがい薬、今治水、かゆみ止め、ばんそうこうがひとつ、箱、のどあめとりップクリーム、うおの目パッド、なにかの記念にもらった万年筆がひとつ、ぼん、売りそびれた文庫本が二冊、パジャマがわりのジャージに、しましまラガーシャツやTシャツや色あせジーンズや下着類、充電式ひげそりと、プレシェーブローションとアフターシェーブローション、ざらざらタオル一枚、ソーラー充電の多機能腕時計とビクトリノックスの多用途万能ナイフがひとつ。

ぼくは、それらを防水加工のスポーツバッグにつめこんで肩にかける。

なにも言わない植木鉢を片手にもつ。

なにも言わない、なにもない部屋をながめる。

1 D K。

悪くない、それほど良くもない。

ジェニーみたいに、お気に入りの窓から景色におわかれしようか。

でも、部屋のふたつの窓は、どちらもお気に入りとはいえない。

窓からのながめは、となりの家の散らかった庭であり、うらの家の灰色の壁だから。

お気に入りとは言えないが、たしかにおわかれをしたくなる景色ではある。

かいぬしも　かわいがつてくれる――

そんなものはいない。

ぼくは、いまも、これからも放し飼ひ。

ジェニーのあとを追って、ぼくは“よのなか”に出てゆく。

ふふふん

へへへん

ぼん！

部屋を出るとき、それを声にださなかったのは正解だった。

となりの部屋の奥さんが、ちょうど玄関から出てきたところだ。